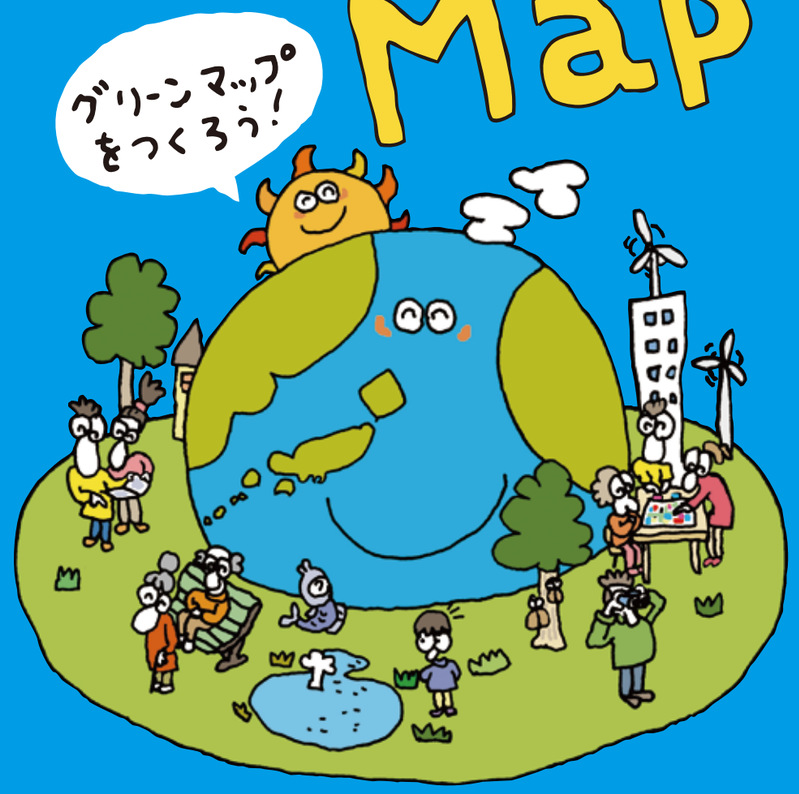
グリーンマップはGreen Map SystemTMの商標であり、
アイコン及びロゴには版権があります。禁無断転載・複製。
版権：Icons © Green Map® System, Inc. 2008

GO! Green Map

GO! Green Map



ゴー！グリーンマップ

グリーンマップあいち
〒460-0014
名古屋市中区富士見町9-16 有信ビル2F
TEL.052-339-5715 FAX.052-339-5651
E-mail: info@gm-aichi.net
http://www.gm-aichi.net

初　　版　2010年7月
発　　行　NPO法人地域の未来・志援センター
編 集 人　中川恵子
企画制作　グリーンマップあいち
編　　集　守内尚子　中村利恵　余吾久美子
デザイン　mi+kan　ant design
イラスト　茶畑和也
Thanks　グリーンマップシステム　NPO法人グリーンマップジャパン　クロスフィット
印　　刷　鬼頭印刷(株)
© Green Map Aichi 2010

GISPRI
愛・地球博
成果継承発展
助成事業

ゴー！ グリーンマップ

グリーンマップ

グリーンマップは「地図をつくる」という行為を通じて、一般市民の手によって、自分の暮らしているまちの環境に良いところ、環境に悪いところなど身近な環境を世界共通のアイコン（絵文字）で表す活動です。樹木や公園の緑、野生生物の生息地といった自然環境のほか、アートスポットや史跡などの文化関連、自然食品店といった生活関連、そしてごみの不法投棄といった環境汚染源まで、地域の住民が調査しながら、世界共通の169個の「グローバルアイコン」と呼ばれる絵文字を使って地図に表す環境マップです。

ウエンディ・ブラウワー（右手前）と仲間たち

ニューヨークの“エコデザイナー”、ウエンディ・ブラウワー（Wendy E.Brawer）によってグリーンマップは1992年に提唱されました。ブラジルで開かれた地球サミットの途中でニューヨークに立ち寄る人たちに、自分が住むニューヨークの魅力ある場所を紹介したいと考えたのがきっかけでした。

現在、世界中で55ヵ国650以上のプロジェクトが進行し、持続可能な社会をめざす人々の国際的なネットワークはすばらしい広がりを見せています。日本では、1997年「地球温暖化防止京都会議（COP3）」で作られた「京都グリーンマップ」から始まり、現在は、NPO法人グリーンマップジャパンとして、京都から国内のグリーンマップ活動をサポートしています。

あなたのまちでも地域の自然・文化・環境を、グリーンマップで表現してみませんか？

2000年・世界のプロジェクト賞
（ハノーバー万博）
・ニューヨーク市立芸術会表彰
2001年・人類のためのテクノロジー賞
（テック・ミュージアム賞）
・Spirit of the Land：環境教育賞
（ソルトレイクオリンピック委員会環境プログラム）
2005年・地球の女性賞
（フランス　Yves Rocher賞）

Think Global, Map Local!

地球を見つめ、地域を描く

グリーンマップあいち

愛知では、2005年「愛・地球博」の県民参加プロジェクトにグリーンマップが採用され、2002年11月に「グリーンマップあいち」が中心となって活動が始まりました。「愛知を持続可能なエコ・コミュニティに！」を共通テーマとして、多様な市民グループがグリーンマップに参加。瀬戸愛知県館「にぎわいの里」では31グループが工夫をこらした地域グリーンマップをつくり、発表しました。万博会期中の8月には地球市民村「グリーンマップ館」を出展し、海外のマップメーカーとの交流を深めることができました。

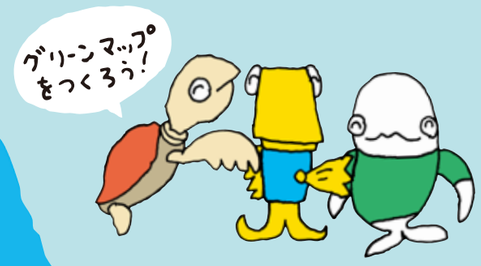
「グリーンマップあいち」は、愛知県内のグリーンマップ活動をつなぐネットワーク組織です。万博閉幕後もグリーンマップシステム（ニューヨーク本部）やグリーンマップジャパン（京都）とも連携しながら、活動を続けています。

2010年は名古屋で開催される「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」で、地域の自然や暮らしと生物多様性のつながりを、市民の視点を通してグリーンマップで表現しようと呼びかけ、活動の輪を広げています。

グリーンマップをつかって活動すると、みんなで地域について考えたり、行動していくきっかけが生まれます。「グリーンマップあいち」では、そんな地域を良くしていこうという活動を応援しています。

もくじ

グリーンマップの特長 …… 4
グリーンマップをつくる 1.準備 …… 6
2.フィールドワーク …… 8
3.まとめる …… 10
グリーンマップアイコンについて …… 12
グローバルアイコン Ver.3 …… 14
アイコンをつかってみよう …… 16
つながる、つづけるグリーンマップ …… 18
日本のグリーンマップ …… 20
世界のグリーンマップ …… 22



グリーンマップの特長

参加する楽しさも、地域に働きかけるチカラもある

1 世界共通の言葉・アイコン

グリーンマップは、世界共通の絵文字「グリーンマップ・グローバルアイコン」（P.12参照）を使って表現することが最大の特長です。アイコンは親しみやすく、子どもにも人気のデザインで、現在169種類あります。シンプルでわかりやすいアイコンは、言葉がなくても世界中で情報を交換することができるツールです。

2 地域を再発見

今まで環境を意識していなかった人でも、グリーンマップの視点で地域を歩くと新しい発見があり、自分が住むまちがどのような地域かを確認することになります。その結果、「どんな地域になったらいいか」など、自発的に考える「気づき」を得ることができます。

3 国際的な視点

グリーンマップのネットワークは世界中に広がり、日々さまざまなプロジェクトが進行しています。地球・環境の問題は1つの国だけでは解決できません。国を超えた市民同士のやりとりにより、国際的なつながり、情報交換の機会を持つことができます。

4 多様性に対応

世界のさまざまな地域の自然や地域特有の伝統や知恵に応じて、世界共通のグローバルアイコンのほかに、地域独自のローカルアイコンをつくることができます。自分たちの周りにある自然や文化とは異なる世界を知る機会にもなります。

5 さまざまな目的に使える

グリーンマップのテーマは地域ごと、活動ごとにさまざまです。それぞれのまちや地域の特徴や問題を、自分たち自身の視点でとらえ、考え、解決、提案するためのツールとして活用されています。

6 地域の環境データベースとネットワークづくり

地域の環境情報を共有することにより、地域のデータベースにもなります。グリーンマップにより、人の輪が広り、地域のネットワークができ、そして新たなテーマや目的が生まれ、さらに新しいプロジェクトにつながっていくこともあります。

7 現実を変えていくツール

グリーンマップはつくりながら、調査し、分析し、検討し、提案するという段階により、現実をすこしずつ変えていくことができます。現実と情報が両輪となって、ステップアップしていける「成長するプログラム」といえます。

さまざまな目的に使える例だよ

まちづくり
- 里山再生
- コミュニティづくり
- 商店街活性化
- 地産地消
- まちのデータづくり
- 防災マップ

伝統文化
- 歴史的建造物のデータ、利用
- 景観保全
- 祭りや市場の紹介
- ものづくり、伝統産業の継承

自然保護
- エコツアー、エコ体験
- 季節や年代別の調査
- 生物多様性の保全

環境教育
- 子どもたちによるマップづくり
- 自然観察
- 3Rの促進（リデュース/リユース/リサイクル）

エコ交通
- 自転車ルート
- 環境負荷のない移動
- バリアフリー

行政との協働
- 環境イベント
- 環境データベース

企業との協働
- 社会貢献活動（CSR）

1 グリーンマップをつくる 準備

知る　好きになる　つながる

POINT 1 仲間をつくろう

グリーンマップは一人で歩いてつくるより、何人か仲間を集めていっしょに歩いたりつくったりするのがおすすめです。新しい発見が生まれたり、いろいろな見方をマップに盛り込めたり、何よりも楽しさが倍増します。学校や、近隣の人、同じ活動をしている人などで、コアメンバーをつくり、広く呼びかけていくこともできます。コアメンバーが集まったら、調査の計画、撮影などの記録、会計など、役割分担を決めると良いでしょう。

POINT 2 つくる目的を考えよう

これから自分たちが歩くところは、どのようなまちや自然環境になったらよいか、住んでいる人たちはどんなふうに思っているかなど、テーマや目的を出し合って話し合ってみませんか。テーマは、身近に感じることができ、わかりやすいものにした方が取りかかりやすいでしょう。複数のテーマを同時に扱うと混乱します。そんな時は話し合う中で、いちばん話が盛り上がったり、多くの人が気になっているテーマから始めてみましょう。

例 歴史、生き物、木や植物、商店街、自転車、子ども…など

POINT 3 エリアを決めて調べてみよう

○○川、○○公園、○○町など、実際にマップをつくる範囲を決めましょう。歩く人数、時間配分など具体的なことが見えてきます。実際に歩くルートも検証してみましょう。安全な道かどうか、交通手段をどうするか、また、訪ねたい店や施設などが開いているかどうかなども調べておきましょう。

POINT 4 ベースマップや資料の用意

実際に歩くエリアの地図をベースマップとして用意しましょう。歩いたルートや気づいたことを書き込めるものが便利です。白地図、道路地図や住宅地図などから大きくコピーできます。たとえば、公園なら木や植物の名前、まち並みならそのまちの歴史、観光スポットなど、歩くときに参考になる資料を用意すると役立ちます。

POINT 5 アイコンを知って、選ぼう

グリーンマップのアイコンは絵で表現されていますが、それぞれに意味があります。アイコンの意味を理解し、歩く地域の特徴やテーマを表すのに必要だと思うアイコンを選んでみましょう。アイコン表をコピーして○をつけてもいいし、アイコンをマネして描いてみるのもよいでしょう。アイコンはたくさん選ぶと、歩く時にあれもこれも気になって視点が散漫になるので、ある程度絞り込むのがポイントです。選んだアイコンをリストにしたものとベースマップを各自が持つようにすると、歩きながらメモがとれるのでとっても便利です。

アイコンを選ぶ時に、当てはまるアイコンがない場合は、オリジナルアイコンをつくるきっかけにもなります。

2 グリーンマップをつくる フィールドワーク

POINT 1 グループに分かれて歩く

ゆっくり見て歩くことを考え、時間に余裕のあるスケジュールを立てましょう。歩くときは4〜5人ぐらいのグループに分かれると目が行き届き、移動もスムーズです。

グループごとにリーダーを決めて歩く方法もおすすめです。最初にルートをみんなで確認し、寄りたい場所があれば、時間を決めておくのもよいでしょう。気になったところがあるときはみんなで立ち止まってみるなど、事前にみんなで歩き方を確認しましょう。

POINT 2 テーマのメガネで歩く

準備のときに話し合って決めた目的、テーマを意識して歩きましょう。

たとえば、歴史をテーマに歩くなら、いつも見慣れている古いお屋敷がクローズアップされるかもしれません。昆虫などの生き物がテーマなら、まち中の木々も見逃せないし、しばらく立ち止まって草の間や水辺をのぞき込んでみることもあります。テーマはメガネのレンズのようなものです。テーマが変わると、同じ場所でも見え方が変わってくるのもグリーンマップの楽しさです。

POINT 3 いろんな目線で見てみよう

歩く目線だけでなく、子どもの低い目線や、足元の舗装や植物、見上げたビルのスカイラインや木に止まっている鳥など、異なる目線で歩いてみると、よく知っていると思っている場所でも新しい発見があります。立ち止まって風や木漏れ日を感じてみるのもよいでしょう。

POINT 4 記録する

気になったことは後にせず、その場でメモしましょう。その時に気になった理由も書いておくと後で思い出すことができます。写真を撮ったり、スケッチするなど絵で表現してみるのもよい方法です。そして、その場所を表すアイコンも選んでみましょう。

POINT 5 聞いてみよう

訪れた店や、施設について質問できる人がいたら、直接話を聞いてみるのも1つの方法です。お店などのお客様の多い場所は、事前に取材を申し込んでおいた方がよいでしょう。

POINT 6 歩く人に合わせて道を選ぼう

ゆっくりと歩くといろいろな発見があります。表通りだけでなく、裏通りにもおもしろい発見があるかも知れません。とくに子どもといっしょの場合は無理をせず安全に。

持ち物の例

筆記用具
簡単に記入でき、持ち運びに便利なもの

ベースマップ
各自、歩きながら書き込むためのマップ

アイコンリスト
選んだアイコンをまとめたもの

カメラ
落とさないようにヒモと名前をつけましょう

飲み物

あると便利

動きやすい服装

はきなれた靴

帽子

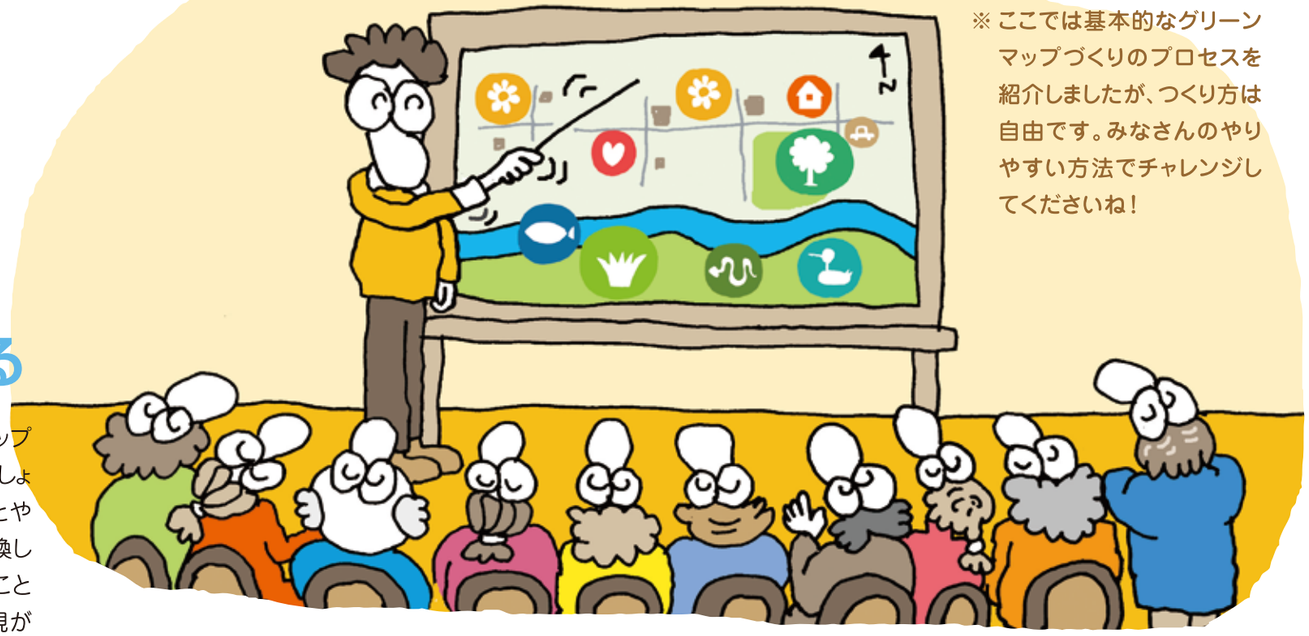
方位磁石

その他、水辺など、場所によっては長靴、虫よけなど

行動する 発見する 楽しい

3 グリーンマップをつくる まとめる

だいじにすること



※ ここでは基本的なグリーンマップづくりのプロセスを紹介しましたが、つくり方は自由です。みなさんのやりやすい方法でチャレンジしてくださいね！

POINT 1 グループごとにまとめる

記録メモを見ながら、まずグループごとにまとめてみましょう。歩いたルートを最初に書くとわかりやすくなります。そして、歩いて気になった場所、その理由を出し合いアイコンを選んでみましょう。同じ場所でも人によって意見が異なったりする場合は、なぜ気になったのか、大事なのか、その理由をみんなで話し合って決めていくことが大事です。

POINT 2 発表する

グループごとにまとめたマップをみんなの前で発表してみましょう。歩いておもしろかったことや大変だったことなど、情報交換しましょう。お互いの話を聞くことで同じテーマでも違った表現が見え、新鮮な発見や驚きで視野が広がります。

わかり合う

POINT 3 1つにまとめてマップに名前をつけよう

グループごとに歩いたマップを一つの大きな地図にまとめてみませんか。

アイコンの場所を、コメントや写真、スケッチなどで表すとわかりやすくなります。場合によってはルートの検証や場所の細かい調査が必要になってきます。

強調したいアイコンは大きくしたり、縁取りをしたり表現に工夫をしてみましょう。地図にはかならず方角がわかるマークをつけましょう。

自分たちが歩いたテーマや目的がわかるような名前をつけると、マップがグンと身近になります。

また、参加者の名前、日付も明記しておくと、続けていく時に役立ちます。予算があれば印刷物にして配布するなど活用できるでしょう。

例 ○○村さんぽみちマップ
○○川生き物マップ
○○通り老舗マップ　など

POINT 4 ローカルアイコンをデザインしてみよう

グローバルアイコンがどうしてもフィットしない場合は、オリジナルアイコン（ローカルアイコン）をデザインしてみませんか。デザインのポイントはマップ上に小さく配置してもわかりやすいことです。絵を見て意味がわかることも大事です。その地域やテーマらしさが出るといいですね。

グリーンマップあいちのローカルアイコンの例

特有な香り　酢・酒・味噌・海の香り…いまだ伝統産業の残る醸造の町ならではのアイコン（知多半島グリーンマップ）

紙の削減　オフィス内で、ペーパーレスに対応していることを表すアイコン。グローバルアイコン「ペーパーレス」のヒントになりました。（リコー中部（株）オフィスグリーンマップ）

POINT 5 地域で展示

つくったマップを学校や地区センターなど、地域の人が集まる場所で展示したり発表してみましょう。歩いた場所をこれからどうしていくか、どうしたいかなど、次のアクションにつながっていくきっかけになります。

つなげる

「グリーンマップあいち」に報告しましょう

グリーンマップ あいち

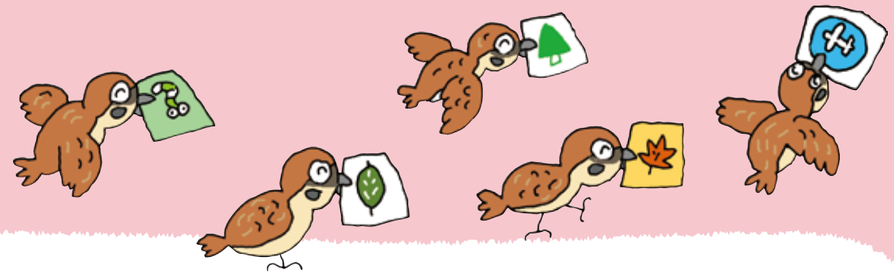
グリーンマップで使用されているグローバルアイコンは、世界中のマップ制作者から提案されたもので、版権があり、グリーンマップの最も大切な資産となっています。グリーンマップシステム（ニューヨーク本部）がこの版権管理を行っており、参加する場合は登録して年会費を支払うことになっています。

愛知でグリーンマップをつくる場合は、「グリーンマップあいち」が事務局となってまとめて登録、管理しています。本部に直接登録することもできますが、その場合もグリーンマップあいちに活動を報告していただくことをお願いしています。

グリーンマップあいち　Tel.052-339-5715　E-mail: info@gm-aichi.net

グリーンマップアイコンについて

グリーンマップのアイコンには、世界共通の「グローバルアイコン」と、
地域の事情に応じてデザインできる「ローカルアイコン」の2種類があります。

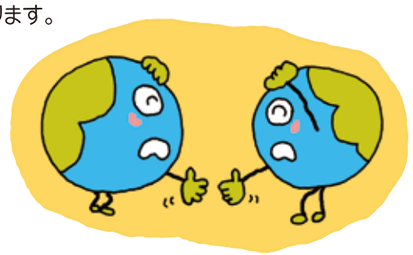


世界共通の絵文字
グローバルアイコン

「グローバルアイコン」は世界のさまざまな地域の環境に合わせてデザインされています。2008年にバージョン3が完成し、世界共通のアイコンは169個になりました。

グローバルアイコンは、「持続可能な生活」「自然」「文化と社会」の3つのテーマに分かれています。地域の文化や言語が違っていても、このアイコンを使うことでお互いを理解したり、情報を交換したり、共有したりすることができます。

環境に良いものを表すアイコンだけでなく、大気汚染やごみ不法投棄など、地域の環境や未来を考えるきっかけになるようなアイコンもあります。



169個すべてのアイコンはこちらで紹介 ➡ http://www.greenmapjapan.org/

グローバルアイコンは、テーマごとに分けられています

テーマ1 持続可能な生活

持続可能な社会の実現のために、循環型社会の基準となるアイコンです。人間が作り出したものがどのような意味をもつのか、循環型社会をめざす地域と暮らしにとって、環境にどのようなインパクトを与えるのかを考えるためのものです。

グリーン経済 / グリーンテクノロジーとデザイン / 交　通 / 汚染と破壊

テーマ2 自　　然

人間の生活の基盤となる地球環境を、地球温暖化、自然環境保全や自然再生（森林、湿地、干潟、河川、湖沼、海岸、里山など）、生物多様性という視点で考えるためのアイコンです。私たちを取り囲む身近な生き物などからデザインされています。

土地と水 / 植　物 / 動　物 / アウトドア活動

テーマ3 文化と社会

かけがえのない地球環境とそれに調和する人間社会との関係を考えるためのアイコンです。地域によって異なる文化や歴史を尊重し、それらを継承することも重要だと考えています。人間を豊かに育んでいくアイコンです。

文化的特徴 / エコ情報 / 公正と運動 / 公共機関とランドマーク

地域独自のオリジナルアイコン
ローカルアイコン

グリーンマップをつくる上で世界共通の「グローバルアイコン」がフィットしない場合には、新たに地域独自の「ローカルアイコン」をデザインすることができます。

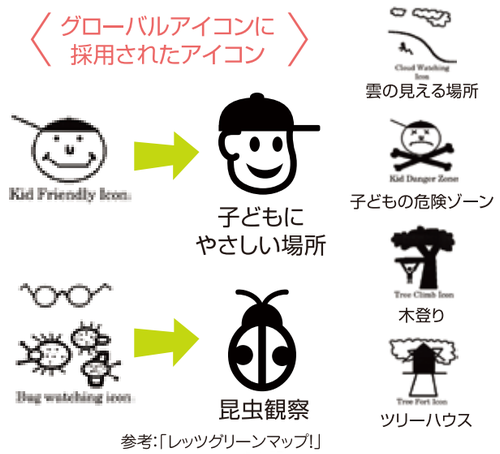
地域の環境について考え、ローカルアイコンのデザインを考えることにより、地域の特徴がよく見えてきます。また、地域文化の再発見だけでなく、世界の他の地域との共通点や、それが今日の地球環境やコミュニティに与える影響はどのようなものかを考えるきっかけにもなるでしょう。

ローカルアイコンをグリーンマップシステム（ニューヨーク本部）に登録すると、世界共通のグリーンマップアイコンに採用される場合もあります。「グローバルアイコン」の中にはローカルアイコンから生まれたものがいくつかあります。

ローカルアイコンデザインの例

カルガリーで生まれた子どものためのアイコン

1997年にカナダのカルガリーで子ども主体のユース・グリーンマップ第1号がつくられました。この時、初めて子どもの視点を活かしたオリジナルのローカルアイコンが12歳の子どもたちによってデザインされました。中でも「子どもにやさしい場所」や「昆虫観察」の2つは世界共通のグローバルアイコンに採用され、バージョン3になった今も世界中で人気のアイコンとなっています。



参考:「レッツグリーンマップ!」

ローカルアイコンをデザインする時のポイント

1. グローバルアイコンをカスタマイズする。
形を変える、付け加える、反転させる、反復させる、色を変えるなど。
2. 新しくデザインする。
固有の植物や動物、文化的に特徴のあるシンボル、新たに提案したい工夫など。

自由にデザインすることも重要ですが、地域の人が見て一目でそれとわかるデザインになっているかも大切なポイントです。

グリーンマップはGreen Map SystemTMの商標であり、
アイコン及びロゴには版権があります。禁無断転載・複製。
版権：Icons © Green Map® System, Inc. 2008

GREEN MAP

グローバルアイコンVer.3 グリーンマップあいち抜粋版

※ここでは169個のグローバルアイコンから84個を抜粋して記載しています。

グリーンマップはGreen Map SystemTMの商標であり、アイコン及びロゴには版権があります。禁無断転載・複製。

持続可能な生活

グリーン経済

産地直売／市場
地元で作られた農産物や加工食品、工芸品を直接販売。

オーガニックカフェ／食堂
地元産の有機野菜を使うなど、持続可能性に配慮した店。

エコ農場／循環型農業
都市型農場から地方農園まで有機・持続可能性等を考慮している。

エコ製品
再生素材など環境に配慮した製品。伝統製品も含む。

地域密着店
地域独自の店。地元素材や製品を販売。地域通貨と連携するなど。

フェアトレード店
労働や資源に対し公正な評価、取引の製品、店、支援機関。

CSR／環境優良企業
社会貢献(CSR)を実施またはそれに近い活動をしている企業。

エコツアー
地域文化や歴史遺産、自然に注目し、保護活動や教育に関われる。

リユース
不要になった物を必要とする人に渡し、そのままの形で再使用する。

リサイクル拠点
資源となる廃棄物を回収、新たなものを作る原料として再利用。

レンタル／シェアスポット
自転車、自動車、菜園用品など。会員や団体で共有して活用する。

修理店
自転車やPC、靴、おもちゃなど技術者が修理する。

グリーンテクノロジーとデザイン

太陽エネルギー
太陽光発電を利用した施設。企業、教育、専門店など。

環境配慮建築
安心して使用できる材料や建設方法で作られている建築など。

屋上緑化
冷却、空気清浄などや、雨水の活用。防火・防音対策などのため。

コンポスト
残飯、落ち葉など、微生物や自然の力を借りた土づくりの場所。

グリーンテクノロジー
浄化技術やバイオマスなど代替技術に関わる場所。

温室効果ガス削減
環境技術により削減している所。情報源も含む。

省エネ
最小限のエネルギーで使用できる製品、プロジェクト、サービス。

交通

自転車関連
自転車に関わるすべてのこと。

自転車(専用)レーン
自転車用のレーン。アイコンをつなげてルートとして表現できる。

駐輪場
自転車を安全に止められる駐輪場。

歩行者優先
トランジットモール、アーケード街など。ラインとして使用できる。

車いすOK
バリアフリーの場所。小道や公園、公共施設、交通機関など。

代替燃料／乗り物
ハイブリッド車、バイオエタノールなどのエコカーに関わるすべてのこと。

パーク&ライド
電気自動車チャージやカープーリング、カーシェアリングの場所も含む。

汚染と破壊

環境荒廃地区
環境が汚染されて悲しくなる場所。

水質汚染
汚水処理が不充分な工場や、有害物質が腐食しているような場所。

ゴミ不法投棄
廃棄物が非合法に、不適切に山積み、放置された場所。

絶滅危惧種生息地
絶滅の恐れのある多様な野生の動植物。

森林破壊
かつて森や林があった場所。

健康に悪い場所
災害、排気ガスなどによって生命の危機にさらされている場所。

自然

土地と水

親水公園
水に親しんだり、遊んだりできる場所。

水のめぐみ
湧き水。泉や滝、大切にされている水など。

湿地／湿原／干潟
重要な動植物の生息環境で、自然または人工の場所。

自然の小径／生物の道
野生生物の通り道。川沿い、川床、峡谷、切立った丘など。

自然の造形／景勝地
自然の力によって生み出された特異な造形や景勝地。

エコデザイン事例／特区
環境に配慮して計画された場所や持続可能な基盤を有している所。

並木道
気持ちよく歩いたり自転車に乗ったりできる道。

植物

公共の森／自然のエリア
森林や林。裏山、神社や大きなお屋敷の森など大事にしたい森。

特別な木
社会の中で文化的、生態学的に大事な木。

固有植物／原生林
地域固有の老齢樹や原産種。外来種ではなく固有種。

コミュニティガーデン
住民やボランティアが管理している菜園や花壇。

花の名所
路上の花々、よく手入れされた花壇など。桜の木が元。

紅葉の名所
紅葉の美しい場所。京都の紅葉が元。

食物採取
食用、採集、野草、釣りなど生態、生息に基づいた採取。

動物

貴重生物生息地
貴重な野生生物や絶滅危惧種の生息地。

野生動物生息地
地域環境に則した動植物生息地。

両生類
カエルなどの両生類の生息地。池や湿地など。

水辺の生物
水中に棲むもの、水上や岸辺、近くの陸地に生活するものなど。

水中生物
良い海水の生態系を保ち、多種の野生生物が繁栄する海洋環境。

動物保護センター／動物園
傷ついたり親を失った野生動物を保護し手当てを施す施設。

生物保護地域
自然の動植物が保護されている、また生息環境が守られている所。

昆虫観察
バッタ、セミ、クワガタなど昆虫の生態がよく観察できる場所。

野鳥／生物観察
鳥やほ乳類など野生動物を観察できる場所。

家畜
牛、馬、鶏、兎など家庭や農園で飼われる鳥獣のいる所。

渡り鳥飛来地点
頭上に鳥の群れが見える絶好の場所。

アウトドア活動

公園／レクリエーション
緑が多く、リラックスしたり遊んだりできる公園。

まちの広場
公園の中や商店街の中など地域で人が集まる場所。

スポーツ／自然と遊ぶ
アウトドアを楽しむためのごく簡単なスポーツができる場所。

美しい眺め
遠くの見渡しがよく、すばらしい眺望が楽しめる所。

夕日のきれいな場所
視界が開け、夕日や日の出がゆったり楽しめる所。

文化と社会

文化的特徴

文化スポット
歴史や芸術、音楽、伝統などに貢献、啓蒙を行っている場所。

アートスポット
まちにある彫刻や壁画など、誰でも楽しめる芸術作品。

人の集まる場所
公園、ストリート、学校など、人が集まり楽しめる場所。

伝統産業／アート工房
伝統芸術、技、工芸品など地域特産品を扱っている工房、店。

伝統的な生活様式
異った生活や文化のある所。伝統的な生活などが体験できる。

地域の歴史／文化財
地域にとって特に記されていない歴史的な所。石碑や彫刻。

遺跡／古跡
歴史的な古い建物、史跡や文化財、古墳など。

コミュニティセンター
地域の交流を深めるための活動に使われる集会所など。

子どもにやさしい場所
子どもたちのお気に入りの場所。公園・人気の空き地。

高齢者にやさしい場所
高齢者のお気に入りの場所や、使いやすい施設など。

安らぎの場
森の中、大きな木の下など、特別にくつろげる場所。

エコ情報

エコ情報源
環境保護や持続可能性についての情報を得られる場所・サービス。

環境教育
屋内外を問わず、環境教育を行っている場所。

グリーンマップあり
グリーンマップの情報やマップが得られる場所。

公正と運動

環境／人権団体
安全や健康、持続可能な環境を意識できる団体や運動。

エコネットワーク
エコに関係する団体が集まって活動したり、つながったりできる場所。

ボランティア
手伝いたい、サポートしたい人が申し込める所。

エコマイスター
環境や地域の資源について優れた情報を得る事ができる所。

福祉／サービス
福祉、就労支援、食料、健康管理、寄付などを提供する所。

公共機関とランドマーク

エネルギー供給施設
水力、火力などの発電所。ランドマークとして。

学校
小学校、中学校、高等学校、大学、専門学校など。

一般的なランドマーク（中に入れて使う）
人々にとって注目される場所。中にアイコンを入れる。

愛知で作成されたローカルアイコンの例

川・矢作川　祭り　里山　伝統的なものづくり　特有な香り　アマモ場　銭湯

アイコンをつかってみよう

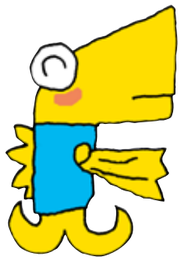
歩いて見つけた場所や気づきを、アイコンで表すと……
グリーンマップでは、フィールドワークで感じた気持ちも大切にしています。

オーガニックカフェ／食堂

地産地消のお店を発見! 地元の有機野菜をつかった定食に、みんな「おいしい!」の大合唱。こんなお店がふえてほしい!

太陽エネルギー

身近な自然エネルギーを調べたら、屋根にソーラーパネルを取り付けている家をたくさん見つけた。家が発電所になっているんだ!



リサイクル拠点

名古屋市内のリサイクルステーションで集めた古紙のゆくえを追った。リサイクルは人のつながりでもあることを実感した。

自転車関連

放置自転車を活用したコミュニティサイクルシステム。CO_2排出量の削減にもつながるし、自転車に乗って、新たなお店を発見できるかも!

特別な木

昔から大切に守られてきた木は、これからも大切にしていきたい。樹齢やいわれなど、後で詳しく調べてみよう。

アートスポット

フィールドワークで偶然見かけた雲のアート。この日、この時、この場がアートスポットになった!

環境荒廃地区

悲しいなと感じる場所もけっこうみつかる。何とかしたい。でも、このマークを減らすには、気づきを行動に移さないと…ね。

子どもにやさしい場所
安らぎの場

子どもの目線でまちあるき。広い原っぱに大きな木が1本。手作りのブランコで遊ぶ子どもたち。ずっと守っていきたい場所だと思った。

水辺の生物

水鳥の足跡が…。ここは私たちのすみかだよ、とメッセージを残していってくれたみたいでうれしかった。

アートスポット

工事の仮囲いがオープンギャラリーに。子どもたちは、地域のアーティストだ。

安らぎの場

フィールドワークの終わり頃に出会ったひととき。夕焼けがノスタルジックな気分を誘い、妙にほっとした気持ちになった。

両生類

最近の田んぼは、カエルも住みづらくなっているらしい。カエルに出会って、なんだかホッとした。

遺跡／古跡
人の集まる場所

歴史ある大須観音。商店街も連なって、たくさんの人たちが集まってくる場所。骨董市もみつけた!

つながる、つづけるグリーンマップ

グリーンマップは地域を知るだけではなく、人とのつながりも生まれるのが魅力です。より楽しくつづけるポイントとグリーンマップあいちの事例を紹介します。

取材でつながるコツ　フィールドワークで得る情報、感じたコトを共通の取材シートやノートで共有

あらかじめ、参加者全員が共通して使える取材シートをつくっておくと便利です。各自がメモをとり、まとめの時にはグループで情報共有しやすくなります。項目は、立ち寄る予定の場所、事前に選んだアイコン、取材で聞けた内容や感想を記入できる欄など。どんな項目が必要かもみんなで考えてみましょう。

プロセスを大切につづける　まちに興味を持ったら、そこで出会う人との交流も楽しみながらマップをつくろう

グリーンマップは、マップをつくることを目標にしがちですが、実は、マップをつくっていく過程で、参加者同士が過ごす時間がとても大切です。準備、フィールドワーク、地図にまとめるという過程で、いろんな意見や感じ方を知り、認め合いながら、楽しんで、発見し合う場づくりでもあります。

マップづくりの目的やテーマを具体的に話し合い、いっしょに歩き、いっしょにまとめていく。その場所に合うアイコンを理由も含めてみんなで話し合いながら選んでいく、そのプロセスは必ず参加した人たちの心に残り、次の行動、アクションへとつながっていくでしょう。

地域の多様性をつなぐ　同じ地域でも違ったテーマでマップづくりにチャレンジ！

グリーンマップを一度つくった地域でも、地図をつくる目的や、参加するメンバーによって、いろんなグリーンマップが考えられます。同じエリアでテーマを変えてグリーンマップをつくってみませんか。新たな発見が少しずつ増えていき、地域が立体的に表現されていくでしょう。持続可能な地域づくりが見えてきます。

例
・季節で変化する木々や植物、生物　・車イスやベビーカー（子ども）の目線で歩く
・歩きではなく自転車での回遊　・通勤ではなく、お散歩ルート　・まちの中の歴史　など

あいちでは…　わたしたち活動継続中！

山崎川グリーンマップ

在来種を守り、次世代に引き継ぐためにグリーンマップを活用

代表者: 大矢美紀
主な活動エリア: 名古屋市を流れる山崎川（主に瑞穂区内）

愛・地球博に向けて子どもたちといっしょにつくった「あいちの海」が最初のグリーンマップです。その後、ふだん活動している山崎川のマップづくりを進め、現在も継続中です。

山崎川は都市河川で、外来種のコイやカメが数え切れないほどいます。それらは大きくて目立つので、「この川には生き物がたくさんいる」と思う人が多くいます。外来種は在来の小さな命を脅かしている存在です。グリーンマップをとりいれたことで、いろんな人たちに、外来種などの問題点や遺したい史跡など山崎川について気づいてもらえました。また、外来種は子どもにとっては身近な生き物ですが、自分の生活とは結びついていない部分があり、それをわかりやすく身近な問題としてとらえることもできました。

地域の在来種を守り、次世代に引き渡したい。そのために活動を続けています。なかなか理解は進みませんが、チャレンジの気持ちでがんばっています。

history

2005年 「あいちの海グリーンマップ」制作（万博で展示）
2008年 配布用「山崎川グリーンマップ」発行
2009年 聞き取り集「山崎川いま・むかし」発行
「環境省・身近な野生生物観察事業」で子どもたちが生き物調査結果を発表
2010年 国際生物多様性の日のイベントに参加

OSHARECO（オシャレコ）

おしゃれにエコを！を合い言葉に、暮らしの2Rを発見していきたい

代表者: 唐木志穂
主な活動エリア: 名古屋市内

「大須エコマップ」を持って実際に歩いた体験がきっかけで、2R（Reduce, Reuse）をテーマにした「OSHARECO 栄 2Rマップ」をつくりました。マイボトルを実際に使えるお店を探して、マップにしました。マップづくりをすると、人やお店とのつながりや対話が生まれて、若者が自然にまちと交流していけます。ウェブやメールとは違って、会って、話して、気づく実感があるのが大きな魅力。マップがコミュニケーションに役立ってくれます。

Reduce=ごみになるものを減らす、Reuse=繰り返し使うことは、とても大切なこと、そして日本の暮らしの中に昔からあったものだと気づき、その想いはフリーペーパー「OSHARECO」になりました。これからは地域の歴史・文化をもっと掘り下げて、今の私たちの生活とつなげていきたいと思います。

history

2007年 「OSHARECO 栄 2Rマップ」制作
全国大学生環境活動コンテスト出場（4位入賞）
2008年～ なごや2Rすいしんちゅうプロジェクト実行委員会に参加
2010年 市内のカフェ、喫茶店の使い捨ての現状を調査
2Rおうえんガイドフリーペーパー「OSHARECO 2010 spring」発行

日本のグリーンマップ

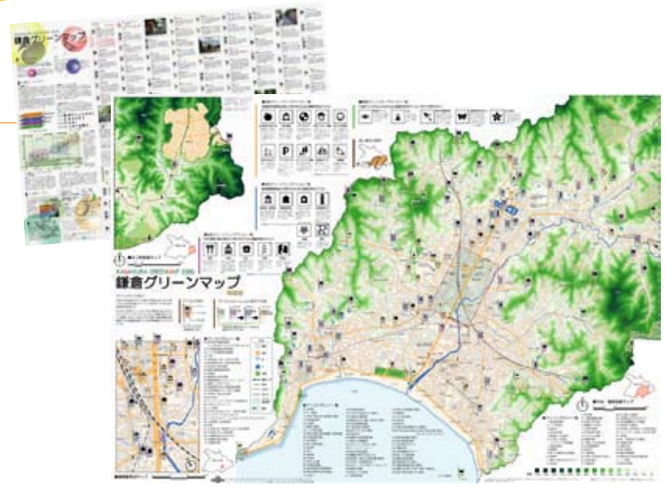
国内、あいちで制作されたグリーンマップの一部を紹介します。

鎌倉グリーンマップ（神奈川・鎌倉市）

歴史をふまえたまちづくり戦略を発見

自然・歴史・文化に恵まれた鎌倉のグリーンサイトを時代区分で分類し、古都保全の重要な視点を発見した例。重要な神社仏閣を壊せと言う人はいないが、大正や昭和時代に作られた魅力ある小径や建物、自然が意識されないまま消えてしまい、それが古都の景観を壊すことに気づくことができた。マップをつくることで、これからの鎌倉の保全の戦略がクリアになり、市民とも問題点を共有できた。

2006 年／鎌倉グリーンマップ



横浜サイクルマップ（神奈川・横浜市）

横浜市都心部コミュニティサイクル社会実験

コミュニティサイクルとは、都市の交通手段として自転車が安価でレンタルできるシステム。サイクルポート（貸出拠点）を設置し、どのサイクルポートでも貸出、返却が可能。2009年秋に約1ヵ月間実施した際に発行。地図面は、エリア内10カ所のサイクルポートと　自転車乗入禁止区域とグリーンマップアイコンで表現した環境情報。裏面には、自転車の利用方法、自転車交通ルール、おすすめコース案内などを掲載した。

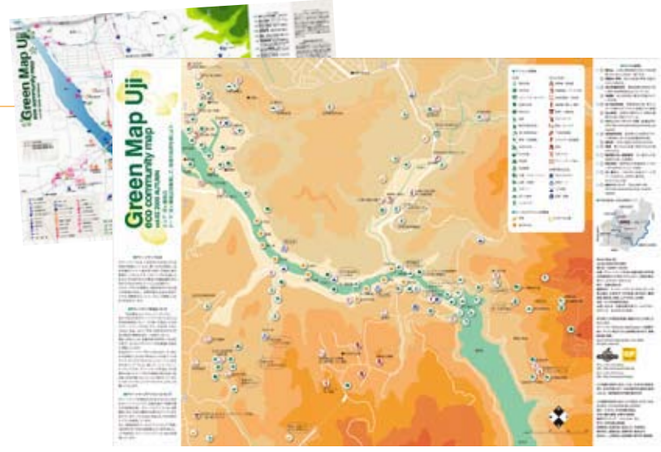
2009 年／グリーンマップ横浜

Green Map Uji vol.1・2（京都・宇治市）

エコ・コミュニティをテーマに活動

地図づくりを通して地元の人たちと交流しながら、宇治市を再発見したいと考える大学生・社会人が活動。vol.1は宇治川を中心に源氏物語、宇治十帖の史跡を巡り、周辺環境について考えるきっかけとした。vol.2では、上流の緑豊かな天ヶ瀬周辺をフィールドワークし、紅葉が美しいポイントやハイキングコースを織り交ぜた。

2008 年 3 月／ 11 月／グリーンマップ宇治



愛知

いっしきグリーンマップ（愛知・一色町）

町民参加の環境基本計画づくりに

一色町は三河湾に接し、日本有数の一色干潟など豊かな自然が残る漁業のまち。町民参加による環境基本計画づくりを前に、未来の一色町を考えるきっかけづくりとしてグリーンマップワークショップを実施した。小中学生を含む町民が「自然・生き物」「暮らし」「水」をテーマにフィールドワークし、その成果をマップにまとめた。子どもの素朴な視線が印象的なマップ。

2008 年／愛知県一色町

瀬戸川グリーンマップ（愛知・瀬戸市）

生き物の多様性をこの川に取り戻したい

瀬戸は1300年の歴史を誇る陶器のまち。中心市街地を流れる瀬戸川は、昭和30年代には白く濁っていることが好景気のバロメーターといわれていた。その後は環境への意識が高まり、川に魚が戻ってきたが、もっと川の環境を良くしていきたいという願いから、このマップがつくられた。瀬戸川には約4kmの間に22本もの橋が架かっている。それぞれの橋に特徴のある陶器が使われていることも地図に載せた。

2009 年／グリーンマップせと

こころがふれあう雁道マップ（愛知・名古屋市）

地図づくりで地域力アップ

マップの舞台となった雁道エリアは、名古屋市瑞穂区のなかでも高齢化が進んだエリア。昭和の雰囲気が残る市場と2つの商店街がある。まちなかで休憩できたり、買い物がしやすいなど高齢になってもずっと安心して暮らせるまちになるよう、学生や地域住民が調査してマップをつくった。これがきっかけとなって、まちに笑顔の輪が広がっていくようにという願いが、表紙のイラストにこめられている。

2008 年／地域通貨みずほの会+地域の未来・志援センター（名古屋市瑞穂区人権尊重のまちづくり事業）

世界のグリーンマップ

海外で制作されたグリーンマップの一部を紹介します。

淡水河川廊道グリーンマップ（台湾／台北市）

湿地と地域のつながりを伝える

1995年に設立した台湾の環境NPO・荒野保護協会（SOW） は、2004年より台北地区の中心部を流れる淡水河（Tanshui River）とその周囲の湿地帯の管理を任され、計1km²におよぶ湿地帯で自然環境の回復、自然教育、調査・研究を続けている。2007年アースデイで「淡水河川廊道グリーンマップ」1万部を発行。湿地の生態圏と地域がつながることを期待して、地域住民や観光客、アウトドア教育用に配布した。

2007 年／企画・制作:荒野保護協会(Society of Wilderness-SOW)

コモングラウンドマップ: 子どもプレイマップ（カナダ／ブリティッシュコロンビア州）

地図づくりで地域力アップ

ヴィクトリアと周辺地域のグリーンマップ・プロジェクトは、2000年に始まり、「コモングラウンド=共有の場」を数多くのグループが、多様なテーマでマップ化し、地域の魅力を伝えている。子どもプレイマップのテーマは、ヴィクトリアのサーニチ半島にある遊び広場。子どもたちが描いた絵もデザインに生かされている。

2007 年／コモン・グラウンド・コミュニティマップチーム

ボロブドゥール・マンダラグリーンマップ（インドネシア／ボロブドゥール市）

世界遺産を地域の伝統文化も含めて守る

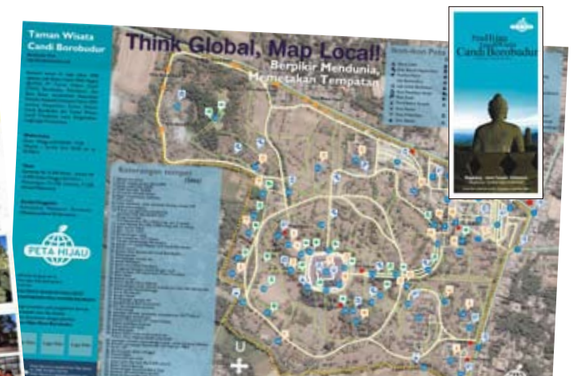
ジャワ島中部にある世界遺産、ボロブドゥール遺跡の寺院群を囲む公園の外側には、伝統的な村々が点在している。観光業の発展は地元住民の経済を支える反面、伝統的な生活を壊し、無謀な開発やごみ増加などの環境問題を抱えている。このマップは、世界遺産を寺院とその周囲に暮らす人たちのコミュニティを含めたものとしてとらえ、その保全を地域総体で考えることを目的に制作された。

2005−2008 年／企画・制作:グリーンマップ・マンダラ・ボロブドゥール

これからのボロブドゥールのために

2005年に始まったボロブドゥール村の良い点、悪い点についてジョグジャカルタのグリーンマップチームと村民が2008年まで話し合ってきた。地元の歴史を聞き取り、地元への評価や期待など、村民と共に状況を踏まえ、今から将来に向けての意見をグリーンマップとしてまとめることができた。

2008−2009 年／企画・制作:グリーンマップ・マンダラ・ボロブドゥール



マンハッタン・コンポストマップ（アメリカ／ニューヨーク市）

大都市でのコンポスト普及に一役

グリーンマップ・グローバルオフィス（Green Map System）とローワー・イーストサイド・エコロジーセンター（Lower East Side Ecology Center）が共同制作。地図面には、コンポストを実践する学校や教育機関、ゴミを捨ててもよいコンポストのあるコミュニティガーデン、情報提供サイト、グリーンマーケットなどを収録。地図裏では、ニューヨークの家庭ゴミの現状、簡単なコンポスト実践マニュアルを紹介している。

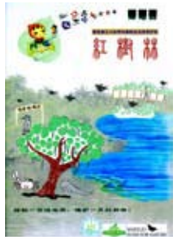
2006 年／グリーンマップシステム + LESEC

マングローブ保全地域グリーンマップ（中国／南東部）

マングローブ林の豊かさを伝え保護に役立てる

中国の南シナ海に面したマングローブ保護を目的とした、ビジュアルな案内マップ。中国語が読めなくても、地図に載っている写真を細かく見ることで、健全なマングローブには多くの生物が棲息していることがみてとれる。この地図は、マングローブには津波の勢いを弱めたり、大洪水を防ぐなど、人間の命を守る役割も果たしていることを教えてくれる。

2007 年／中華マングローブ保全ネットワーク



ディア・グリーン・プレース（スコットランド／グラスゴー）

リユースをテーマに、実用的な情報を網羅

「いとしき緑のところ Dear Green Place」という意味を持つグラスゴーは、スコットランド最大の都市。市全域を収めたグリーンマップ初版は「リユース-再利用」にテーマを絞った。家の中にあるものを14カテゴリーに分け、アイコンを創作。地域のリサイクルフォーラム、グラスゴー美術学校、ジェネラス・スコットランド（リサイクルショップで、ゴミ問題への関心を高めるための国家事業）の協力を得てつくられた。

2007 年／企画・制作:グラスゴー・グリーンマップ・チーム